

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 根岸 雅史 印

学位申請者 牛山 真弓

論 文 名 *The Effect of Languaging on the Grammatical Accuracy of Writing and Speaking English as a Foreign Language in Junior High School*

【審査結果】

根岸雅史を主査とし、主任指導教員の吉富朝子、および副査として投野由紀夫、海野多枝、高島英幸（外部委員）から成る審査委員会は、2022年2月18日に上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本研究は、Swain (2006) の主張する languaging, すなわち、学習者が言語を認知機能として使用し、自身の発話の誤りに気づき、修正を行うことを通して理解を深める過程が、英語を外国語として学習する中学生の産出技能に及ぼす影響を明らかにしようと試みた実証研究である。具体的な目的は、languaging が日本語を母語とする中学生の英語ライティングおよびスピーキングにおける文法的正確性を向上させるのにどの程度有効であるか、どのような languaging の方法がより有効かを、三人称単数現在を表す文法形態素（以下、「三単現」）の使用に着目して検証した。

論文は全5章から成る。第1章では、日本の中学校における英語授業の課題と languaging を授業に取り入れることへの可能性を述べている。現状の多くの英語の授業において「文法の説明」や「文法の練習問題」はよく行われているにも関わらず、文法学習につまずきを感じる生徒が多いが、その原因は「目的・場面・状況」を伴った文法指導が行われていないことや、生徒が英文を書いたり、書いた英語に対して教員がフィードバックをしたりすることが質的・量的に十分に行われていないことにあるという点を指摘している。また、現場の英語教員もまた指導について改善策を模索している現状に触れ、生徒の自律性を高め、言語活動を通して生徒が文法的正確性を向上させるより適切な指導法のひとつとして、languaging の可能性を探ろうと考えた研究計画への背景や経緯が述べられている。

第2章では、focus-on-forms から focus-on-form までの英語教育の変遷を振り返った上で、**languaging** を英語の授業に取り入れることの意義、本研究における **languaging** の定義、先行研究で示された **languaging** の有効性、異なるフィードバックによって引き起こされる **languaging** の種類、および **languaging** が関わるデータの分析方法についてまとめている。先行研究では、黙って課題に取り組んだ学習者よりも、**languaging** を行った学習者の方が、より正確で深い理解に到達し、学習した内容をより長い間記憶していたことが示されたことから、日本の中学校の英語授業で、ライティング活動後のフィードバックの際に **languaging** を取り入れれば、生徒が自身の文法的間違いを振り返り、修正することができるだけでなく、文法規則の理解を深めたり、正確性を保持したりすることができるのではないかということが示唆された。

第3章では、2010年と2011年に実施した予備研究の研究デザインおよび結果と考察、第4章では、2013年に実施した本調査の研究デザインおよび結果と考察を述べている。

本研究の参加者は、日本の公立中学校に通う12歳～13歳の生徒53名で、中学生にとって定着に時間がかかる三単現の使用における正確性の向上について、事前テスト、事後テスト、および遅延テスト2回によって検証した。生徒には、事前学習として三単現のメタ言語的説明ができるようにするための指導と活動を行った。4か月後に事前テストとして、「私の家族」をテーマとした英作文を書かせ、同テーマでスピーキングテストも行った。テスト後、グループを2つに分け、27名の生徒（**languaging** を行う LG グループ）の作文には、三単現のエラー箇所が分かるよう下線を引き、もう一方の26名の生徒（教師から直接修正 **direct correction** を受ける DC グループ）の作文には、教員による明示的な修正を行った。3日後、それぞれのグループに作文を返却し、LG グループにはペアで **languaging** として対話をしながらエラー箇所を修正するとともに、気付いたことを書きとらせた。DC グループには各自、黙って修正箇所を確認するよう伝えた。LG ペアの対話は IC レコーダーに録音し、書き取ったメモとともに分析した。10日後に事後テストを行い、事前テストと同じテーマ、同じ時間制限で作文を書き、スピーキングテストも行った。さらに、**languaging** の長期的な効果を検証するため、1か月後と7か月後に遅延テストとして、定期試験中の三単現に関わる問題の解答のみを取り出し、分析した。

事前・事後テストにおける英作文データおよびスピーキングテストの音声を文字化したデータにおける三単現の義務的文脈における正用率を算出した結果、LG グループ・DC グループともにライティングの正確性に有意な向上が見られたが、両グループ間の差は有意ではなかった。また、**languaging** の方法による効果の違いを検証するために質的分析も行

った結果、LG グループの生徒は、①対話しつつメモにおいてもメタ言語を使用した生徒のグループ、②対話のみでメタ言語を使用した生徒のグループ、③自力では修正ができず、ペアの相手のメタ言語を繰り返して用いたり、メモをとった生徒のグループ、④ペアの相手のメタ言語を繰り返しただけの生徒のグループ、⑤黙ってペアの相手のメタ言語を聞いていた生徒のグループの5つに分かれた。このうち、①のグループの正答率の向上がもっとも顕著で、DC グループをはるかに上回った。次いで大きな変化が見られたのは③のグループで、事前テストではグループの生徒全員が正答率 0%であったのが、事後テストでは大きく向上した上に、遅延テストでは正答率 100%となっていた。②と④のグループに属する生徒には結果にばらつきが見られた。

スピーキングテストの分析結果では、ライティングテストと同様、LG グループ・DC グループともに三単現の正確性において事前テストと事後テストの平均値に有意差が見られたが、両グループ間の差は有意ではなかった。また、*languageing* の方法が異なる5つのグループを比較分析したところ、ライティングテストの分析結果と異なったのは、対話のみでメタ言語を使用した②のグループが、事後テストにおける正確性で向上していた点だった。このグループの生徒を個別に分析したところ、スピーキングでは限られた数の高頻度動詞を繰り返し使用しており、それが理由でエラーの比率が少なかった可能性が認められた。また、ライティングでは、三単現がついた一般動詞を *be* 動詞と一緒に用いるといった過剰使用があったことから、ライティングにおける振り返りの時間がむしろ弊害となった可能性も示された。さらに、ライティングとスピーキングにおける三単現の発達段階に違いがあることも示唆された。

第5章の結論部分では、本研究から得られた中学校の英語授業への示唆、研究デザイン上の問題、反省点、今後の課題を述べている。本調査では、*languageing* が日本語を母語とする中学生の産出技能における文法的正確性を向上させるのに、教員からの明示的な修正指導を受けるのと同等の効果があることが実証された。とりわけ、*languageing* の中でも対話とメモによるメタ言語の使用という方法の *languageing* に最も大きな効果が見られた。さらに、自力でエラー修正を行うことができなくても、ペアの *languageing* を繰り返し、メモをとることによって正確性が向上する可能性も発見された。

以上のことから、教育的示唆として、1) 教員による一方向な文法指導ではなく、学習者中心の文法学習の効果が示されたこと。2) 学習者同士の協働的な学びの有効性を上げるためには、効果的なペアの作り方がありそうであること。3) メタ言語によるエラー修正の有効性を学習者が経験できれば、自律的学習の促進につながりうること。4) 学習者の誤りデ

一タから、三単現の指導において、be 動詞・助動詞・一般動詞の区別の理解を促す指導が重要であること、が挙げられた。また、第二言語習得過程という観点からは、三単現の発達段階と思われるデータが発見され、それが技能によって異なる可能性が示された。一方で、本調査の限界として、単一の文法形態素を取り上げていること、正用率を計算する採点方法が発達段階を十分に反映できるものではなかったこと、教育的配慮から完全統制群はいなかったこと、LG グループはペア活動であったのに対して DC グループは個人活動であったため、純粋な LG 対 DC の比較にはなっていないことが、サンプル数が少なかったことなどが指摘されている。

【審査の概要及び評価】

審査では、牛山氏による博士論文の概要の発表の後、各審査委員からまず本論文を評価できる点として、以下のことが述べられた。

1. 英語教育学にも第二言語習得研究にも貢献する教育実践上の意義および学術的意義の高い実証研究である。
2. 今後の研究への展望として、さまざまな可能性を読み手に考えさせる研究である。
3. 先行研究が詳しく体系的にまとめられていて、読みやすい論文である。
4. 第二言語習得環境では有効性が実証されている **languageing** を、外国語学習環境である日本の文脈内で実践に応用した試みは意欲的である。
5. 三単現の発達段階についての提言が学習者言語分析の観点から見ても興味深い。
6. 量的分析と質的分析を行っていることで、全体的な傾向とともに個別の学習者言語の様相が捉えられていた。
7. 教育現場にありながら、その中で研究課題を発見し、長年にわたる調査を地道に積み重ねた集大成として、研究をまとめ上げたことは評価に値する。

このように、牛山氏の博士論文が高く評価できるものであると確認された上で、質疑応答では以下のような指摘がなされた。

1. 教科書での三単現の扱い、授業での説明・指導の仕方、塾での学習等についての説明が足りなかったのではないか。教科書は出版年によっても内容が異なるが、それを踏まえたか。
2. 主語が **he/she** で高頻度動詞の三単現が使えているというデータだけで、三単現が真に理解できているという証拠となりうるのか。とりわけ、「三人称」という概念の説明は適切であったか、また、生徒は本当にその概念を理解できたのか。
3. 誤用でも正用とみなしたものを「正用」と言及したり、**be** 動詞の過剰使用と思われるエラーを三単現の過剰使用と捉えているのは問題ではないか。

4. 先行研究では languaging を多用する high languager と多用しない low languager の違いが取り上げられていたが、本調査結果ではあまり考察されていない。また、languaging の量的な差だけでなく、質的な違い（内容や適切さ）に着目し、学習スタイル等の個人差によって languaging の効果の出方などに違いがでる可能性についても考察できたのではないか。
5. languaging で言語化されない内言もあることを考慮すべき。また、今回はメタ言語的説明のみを languaging とみなしたが、問題個所の繰り返しや「ここがわからない」といった自己評価等のプライベート・スピーチからも分析できる学習者特性があるかもしれない。
6. 日本語を母語とする英語学習者についてのみ論じているが、第二言語習得研究の観点から他の言語を母語とする英語学習者についても先行研究のまとめに含めると良かった。
7. 研究デザインでは、三単現の誤りに下線を引いたものを languaging させ、DC グループとの比較をしたが、下線だけ与えて一人で考えさせるグループも設けるべきだったのではないか。
8. LG グループではペアの相手の説明を聞くだけの生徒もいたが、その場合教師から明示的な修正を受けるのとどう違うのか。
9. なぜコミュニケーション上の影響力が少ない文法形態素を選んだのか。文法項目によって languaging の効果の程度が異なるのではないか。
10. languaging をさせてメタ言語を使った説明に時間をとるよりも、言語活動そのものを増やしたほうがいいのではないか。メタ言語知識が非常に限定された中学生に languaging を求めていいものか。与えるタスクももっと生徒にとって取り組みやすい、面白いものにすべきだった。
11. 義務的文脈における正用率は、どれくらい正答できているかということを示す数値として信頼性があると言えるのか。
12. スピーキングとライティングでは三単現の発達段階が異なる可能性を述べているが、発達段階そのものが異なるのではなく、学習者言語知識を運用する際のプロセスが 2 技能において異なるということではないか。発達段階についても点数による分析だけでなく、カテゴリに分けた分析がありえたかもしれない。

牛山氏はこれらの質問や指摘に対して的確に応答するとともに、自らの研究の限界を認識しその改善法についても十分に理解していることが窺える返答をした。具体的には、以下のような回答をした。

1. 三人称の説明の仕方については複数の教科書での扱いや解説内容等の分析をもっと行い、塾での指導についてもアンケート調査で調べられれば良かった。
2. 指導や練習の中では、主語が he/she 以外の文例もあり、ライティングでは他の動詞も使用されていたことから、三単現や三人称の概念はある程度理解できていたのではないかと

解釈した。同時に自身でメタ言語的説明はしているのに、正確に書けなかった生徒もいたことから、三人称の意味概念が完全に理解できているとは言い切れないことも確かだ。

3. 今回の分析では、be 動詞と三単現の動詞形の不要な併用を「過剰使用」とみなした。

4. 予備調査 1 では、**languaging** を能動的に行う学習者と受動的な学習者の区別はした。その結果、より能動的でメタ言語の発話量が多いのは外向性の高い生徒であった。学習スタイル・性格・理解の度合いによる個人差が認められたので、どのようにペアを組むかによっても **languaging** の効果に違いがでることが考えられる。

5. 内言やプライベート・スピーチまでは考慮できなかったが、今後の研究では検討すべき観点である。

6. 日本語が母語の学習者に対する英語教育実践に焦点を当てていたため、母語が日本語ではない英語学習者について今回は考察に至らなかった。

7. 研究デザインにおいて、完全な統制群を設けなかった点や、実験群が **languaging** の有無のみによる比較にはなっていなかった点など、いくつかの問題があったことは認識している。今後の研究で改善したい。

8. LG グループではペアの相手の説明を聞くだけの生徒でもメモを取った場合は正確性の向上が見られたのに対して、ずっと黙っているだけだった生徒には向上が見られなかった。生徒同士がきちんと協働すれば活動に意義があることは示せた。

9. 三単現を対象としたのは、難しい学習項目であるということだけでなく、ベネッセ教育総合研究所などの調査で中 1 の前半に英語学習につまずく生徒が多いことが示されているため、その時期に導入される文法項目を取り上げ、その定着を促進できればつまずきを減らせると考えた。また、**languaging** の効果は文法項目によっても、タスクの難易度や学習者の習熟度によっても異なると考えられる。

10. 言語活動を増やすことも重要であるが、まずは教師中心でない学習方法へのシフトを提言したかった。授業で **languaging** をいつも行うのではなく、さまざまな活動の一つとして取り入れることによって自律学習の促進につながると考えた。また、メタ言語の使用は大人の学習者により向いていることは確かだが、中学生の場合ではその効果がどうかをそもそも検証したかった。結果として、中学生同士の活動でも教師主導型と変わらないくらいの効果があったことを示せたのは意義があった。調査後に行った生徒のアンケートでも **languaging** に対する反応は肯定的だったことを確認できた。

11. 義務的文脈が少なかったことは確かだが、正用率は動詞のタイプとトークンとでそれぞれ分析しており、更に個人データを質的に分析したので、全体傾向としての正確性の向上は実証できたと思う。今後の研究でサンプルを人数・学年・学校数等において増やすことが必要だと認識している。

12. スピーキングとライティングにおける三単現の使用の特徴の違いについては、より粒度の高い採点をすることで数値の上で更に明確に示せた可能性がある。カテゴリによる分

析は今後の課題としたい。

最終試験後の審査委員会での審議においては、委員からの指摘の多くが、牛山氏の論文から導かれる今後の研究への展望を示したもので、本調査がもつ教育実践上の可能性や学術的意義を高く評価した上での期待の表れとみなすべきものであったことが確認された。

以上の論文評価および最終試験での質疑応答の内容から、本論文は英語教育学の実践面および第二言語習得研究の理論面の双方に大いに貢献する秀逸な論考であり、学位申請者が優れた研究者・教育者としての資質を十分に有していると判断された。よって審査委員会は、全員一致で、学位申請者が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。